

1 はじめに

従来、笠原沼は江戸時代初期に利根川東遷に伴い関東郡代伊奈氏により関東流という手法で上下に堤を造り、下郷の開発のため造成したといわれてきた（『みやしろ風土記』等）。近年、新出の古文書等の発見や既存の古文書の再検討により大河内金兵衛により造成されたことや年代について、より具体的に解明する要素が出てきたといえる。

笠原沼の概要については、平成12年7月8日の東武低地研究会の発表において「江戸時代前期から中期にかけての水争いの一事例」で述べたことがある。ここでは、笠原沼の概要や水争いなどについては省略し、笠原沼の造成の年代について重点的に解明してみたいと思う。

2 笠原沼造成以前

近世以前の笠原沼は、古利根川の後輩湿地であったと推定される。南側は標高8メートルほどの台地の縁辺部で、北側には埋没台地上に20センチから50センチの自然堤防が堆積する。さらに自然堤防は古利根川に近づくほど堆積が厚くなり、須賀地内の発掘調査によると埋没台地上に2メートル以上自然堤防が堆積しているところもある。笠原沼の跡に建設された笠原小学校建設時のボーリング調査によると沖積層が17メートル堆積していたという。笠原沼で田んぼを耕作していた人の話によると中水道より南側の宿（笠原沼百間西原組新田）の人はではホツツケをノロアゲする際、底は赤土だったというが、北側の須賀（笠原沼須賀村新田）の人は、底はドブッタのようであったという。

これらのことから、笠原沼成立以前、北側の自然堤防に面する地域は後背湿地であり、南側は台地の縁部であったと推定される。おそらく、中水道北側については低湿地帯で萱や葦の自生地や一部水を湛えた沼状の場所であったのであろう。

3 笠原沼造成の年代について

1) 小沼の開発

笠原沼の造成を考える時、重要なのは小沼の開発がいつであったかという問題である。小沼は笠原沼の東側に続く位置にあった湿地帯と推定され、昭和5年まで小字として残っていた。

小沼の開発については、百間村の元和5年（1619）の検地帳が残っていないため、詳細は不明だが、この検地帳の書拔である享保14年（1729）の百間中島村水帳写百姓持高改帳によると「下田」として7反5畝15歩が記載されている。これらのことから、元和5年段階には小沼は耕地として把握されていたようであり、万治2年頃（1659）の「溜め沼絵図」に見られる周囲を囲む堤や元禄6年の「騎西領落堀堰論裁許状絵図」に見られる小沼の落堀はすでに構築されていた可能性があるといえる。

ここで問題となるのは小沼耕地と笠原沼の湿地とを画する横手堤の存在である。横手堤は見沼成立時の「八丁堤」と同様の機能があったと推定されることから、笠原沼成立時に構築されたと推定される。それ以前に関しては不明といわざるをえない。しかし

たら、横手堤の場所にも小沼耕地を囲むような小規模な堤があった可能性はある。

2) 笠原沼造成の年代

笠原沼の造成については、大河内金兵衛久綱との関係や宮代町に残る古文書からある程度推定が出来る。ここでは1つ1つの要素から笠原沼造成の時代を探りたい。

①笠原沼造成の主体者は大河内金兵衛久綱であったことが、享保7年（1722）と推定される「地先出入訴状」で確認できる。大河内金兵衛は「地方の奉行」であったと『寛政重修諸家譜』にも記載され、「地方の奉行」であったのは寛永15年（1638）までとある。このことから笠原沼造成は寛永15年以前であるといえる。

②この「地先出入訴状」には、興味深い記述がされる。これには、「元和5年（1619）に百間領 5000 石の検地が行われ、寛永元年（1624）には百間領の須賀村・蓮谷村は旗本水野氏、旗本池田氏、旗本永井氏に三分され、その時には、論所が年貢を上納していた場所であった」とある。論所については後に述べるが、このことから、寛永元年には笠原沼は造成されていなかったことが分かる。ちなみに須賀村は元和5年の須賀村検地帳が今にも伝わっている

→①と②から寛永元年（1624）以降、寛永15年（1638）以前に笠原沼は造成されたことが分かる。

③「溜め沼争論絵図」によると、笠原沼北縁の字五丁から東側付近の田場に水がかぶっていることが確認できるため、元和5年（1619）の検地で田場として把握されていた土地が、笠原沼の造成により荒地となったと推察できる。この場所については寛永13年（1636）の須賀村年貢割付状（旗本永井氏）に「下田1町8反1畝歩毎年荒二付」という記載がある。その後の慶安元年（1648）の須賀村年貢割付状（旗本永井氏）には「壱町九反八畝廿七歩毎年どぶニ引き」とあることから寛永13年（1636）に確認できる荒地が慶安元年には若干増えていることが確認できる。これらの文書と関係があるものとして、正徳5年（1715）の「笠原沼蔣草植付願」がある。ここでは「笠原沼之内 殿様御知行所下田壱町九反八畝貳拾七歩有之候、彼沼古より下郷用水溜沼ニ御座候故永荒地ニ罷成候、然処ニ廿七八年以来（元禄2年）蔣植置面々馬草刈取申候所ニ、八年以前（宝永5年）開発被為 仰付」とあり、享保7年（1722）と推定される「地先出入訴状」にも「右永荒地何とそ開発仕候様ニと御地頭（旗本永井氏）より被仰付、別高開発仕候処ニ御帳面ニ壱町九反八畝廿七歩御座候處ニ漸壱町壱反余立帰リ之分御座候、年々相応之御年貢指上ケ来候」とある。これらの事から、「溜め沼争論絵図」で確認できる笠原沼北縁の字五丁から東側付近の田場に水がかかっている場所が、永荒地となった「壱町九反八畝廿七歩」の土地であることが分かる。

→①と②と③から寛永元年（1624）から、寛永13年（1636）までの間に、笠原沼が造成されたものと推定される。

3) 慶応2年須賀村年貢割付状について

平成14年12月14日、宮代町大字須賀の渡辺氏宅の土蔵から多量の江戸時代末期から明治期の古文書が発見された。渡辺氏は須賀村の領主であった旗本池田氏の組頭や年番名主を勤めていたことが他の古文書群により明らかであった。古文書群は所在番号を付け見取り図や写真、ビデオで記録を取りながら丁寧に引き上げ作業を行った。

その中から、慶応2年(1866)の年貢割付状が発見された。これによると堀敷引きとして享保13年(1728)・14年(1729)の笠原沼の開発に伴う用悪水堀の引き分と共に寛永2年(1625)の堀敷分の記載があった。須賀村は先に述べたとおり元和5年(1619)に検地が行われている。元和5年以降に用水または悪水敷として寛永2年(1625)に開削が行われたことは明らかである。その場所については本割付状からは不明であるが、万治2年頃(1659)と推定される「溜め沼絵図」によれば上の土手付近から派生する用水や元禄6年(1693)の「騎西領落堀堰論裁許状絵図」の備前堀の堰からの引かれる用水と関係があると推定される。どちらも、流路は現在の中須用水(笠原北側用水)の一部であることが分かる。備前堀とはその名称からも伊奈備前守の開削だと伝わる。少なくとも、備前堀からの用水は寛永2年に開削されたことは明らかであろう。なお、備前堀の堰については寛文12年(1672)の裁許状でも確認できる。備前堀からの用水は桑原村・須賀村・蓮谷村の古田を灌漑し、笠原沼下手の姫宮堀の道仏堰でさらに取水し、姫宮堀北側の道仏村(後の百間中島村)や百間村(後の百間東村)の内柚木・松ノ木島(現在の字宮東)の古田を灌漑していた。

ここで重要なのは道仏堰(溜め沼絵図では2箇所確認できる)の存在であろう。道仏堰は享保7年(1722)と推定される「地先出入訴状」において、大河内金兵衛久綱の笠原沼造成に伴い構築したと記されている。これらのことから、備前堀からの用水の開削と道仏堰の構築、笠原沼の造成(金兵衛堀＝爪田谷堀の開削と笠原沼への流し込み)は密接な関係といえる。当然、笠原沼の造成は下郷の用水供給と田地の開発のためである。これこそ、江戸時代前期の関東流による開発の一端だと考えられる。

これらのことから、現在までの所、笠原沼の造成が寛永2年(1625)であると推定している。

4) まとめと今後の課題

今回の発表では笠原沼の造成が推定できる元和5年(1619)から寛永13年(1636)の間で古文書に残る記年名が初めて確認できた。しかし、これをもって笠原沼の造成が寛永2年(1625)だと断定することは出来ない。しかし、備前堀からの用水の開削、道仏堰の構築、爪田谷堀の開削と笠原沼の造成は非常に密接に関係するものであるといえる。現段階としては、寛永2年に備前堀からの用水が伊奈備前守あるいは大河内金兵衛により開削され、須賀村の土地の一部が堀敷となったということである。この用水が大河内氏ではなく伊奈氏により開削されたとしても、備前堀の堰のみでは道仏村や柚木・松ノ木島の田地を灌漑するには水量が足りないため、大河内金兵衛は笠原沼を造成し下手の道仏堰を造り加水したといえる。ゆえに、笠原沼の造成は寛永2年(1

625) から寛永 13 年 (1636) までと推定するのが妥当であるといえる。今後の新出資料が待ち望まれる。

大河内金兵衛は関東郡代の伊奈氏と重複するところが多く県東部ではあまり知られていないといえる。しかし、爪田谷堀が金兵衛堀と称されることや備前堀も金兵衛堀と記載されていることなど、地元では落堀の名称などとして僅かながら存続している。一方、伊奈備前守についても町内に備前堀が存在する。堀の開削と堰の構築などで大河内金兵衛と伊奈備前守はオーバーラップするところがあるが工事の意味合いや年代等、後に関東郡代と称された伊奈氏との役割分担を考え、今後詳細に検討する必要があると考えられる。

大河内金兵衛は周知のとおり「知恵伊豆」こと幕府老中を勤めた松平信綱の父にあたる人である。忍城・宇都宮城の城代や妻沼や鉢形、騎西に陣屋を設けていたこと、羽生領や忍領の代官を勤めていたことなどが、伝承や資料などから確認できる。年代から見ると伊奈氏と同時期の地方の奉行として大河内氏が存在しており、県東部においてもその重要性は計り知れない。今後の研究により大河内氏の再評価がされると推定される。

本発表の趣旨とは逸脱するが、慶応 2 年 (1866) の須賀村年貢割付状には享保 13 年 (1728) ～16 年 (1731) に堀付田堀敷が確認できる。これらのことから、須賀村古田 (旗本池田氏) の一部が堀上田になったことが推定され、笠原沼新田の堀上田についても、享保 13 年 (1728) ・14 年 (1729) の笠原沼の開発と同時期から享保 15 年 (1730) ・16 年 (1731) までに堀上田のクリーク (地元ではホツケと呼ぶ) が構築されたと推定される。なお、笠原沼須賀村新田明細帳には「當村新田 右ハ前々より窪地ニ御座候ニ付堀上ケ田ニ御願申上候而五分通り之堀上ケ田ニ被仰付」とあり、笠原沼の開発 (爪田谷堀と野牛高岩落堀と下手の姫宮堀と繋げる笠原付廻堀の開削で排水を古利根川に流す普請と、利根川から見沼代用水をへて笠原沼代用水を開削し笠原沼の下手の村への用水の確保のための用水普請) ののち村民の「御願」により堀上田となったことが分かる。

ちなみに本文書が発見される以前は元文 3 年 (1738) の史料で笠原沼須賀村新田の堀上田堀敷引が確認されていた。なお、堀上田については井沢弥惣兵衛による紀州流の典型であるとの指摘があったが、最近はそれ以前から堀上田が行われていることが明らかとなっている。須賀村においても字五丁付近の宝永 5 年 (1708) の開発の際、堀敷であったところが、笠原沼開発後の享保 16 年に田地に戻っていることが史料から確認できる。これらの堀付田堀敷が今日みられるホツケと同様であったかどうかについては不明であるが、享保期以前の開発において堀上田が確認できることは特筆できるものと考えられる。今後は笠原沼造成の年代と共に堀上田について詳細に検討したいと思う。

参考文献

続群書類従完成会『新訂寛政重修諸家譜』1965

宮代町教育委員会『戸田家文書』1992

宮代町教育委員会『岩崎家文書』1994

青木秀雄『みやしろ風土記増補』宮代町教育委員会 1994

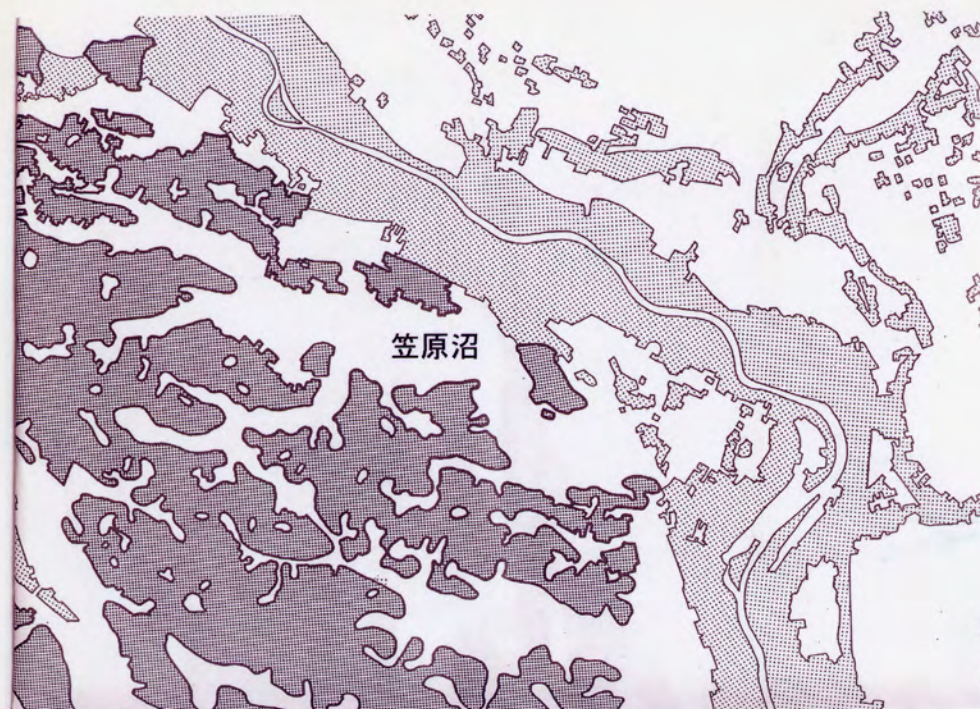
河井伸一「笠原沼新田開発の方法」(『宮代町郷土資料館常設展示解説図録』) 1998

宮代町教育委員会『折原家文書』2000

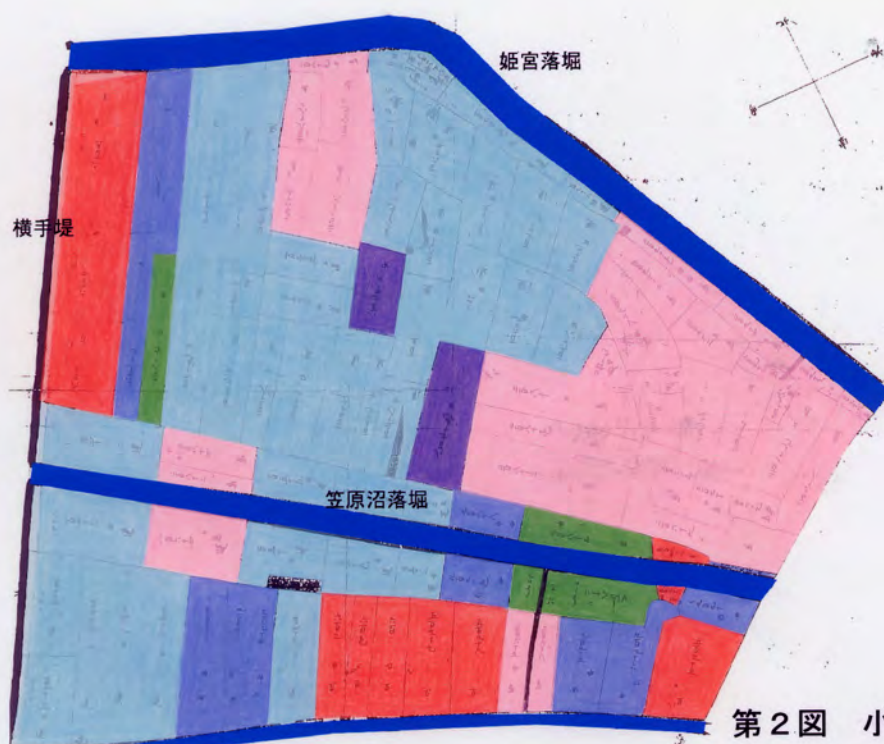
河井伸一『企画展笠原沼展示図録』宮代町郷土資料館 2000

林貴史「笠原沼の開発」(『宮代町史通史編』) 宮代町教育委員会 2002

河井伸一「笠原沼の開発と久米原村」(『東条原村岡安家文書』) 宮代町教育委員会 2003



第1図 笠原沼周辺地形図
(埼玉県土地条件図を加工)

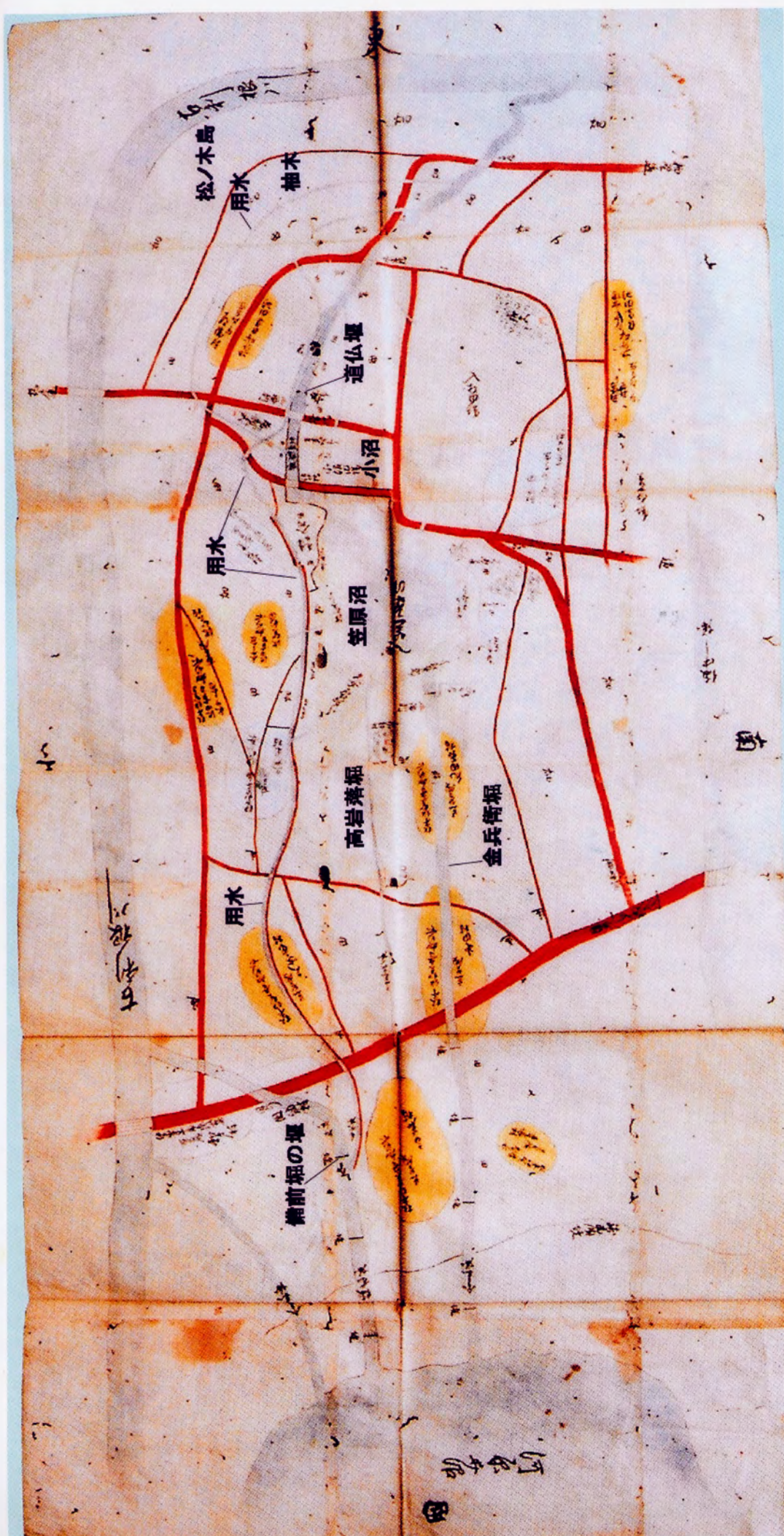


第2図 小沼耕地地籍図

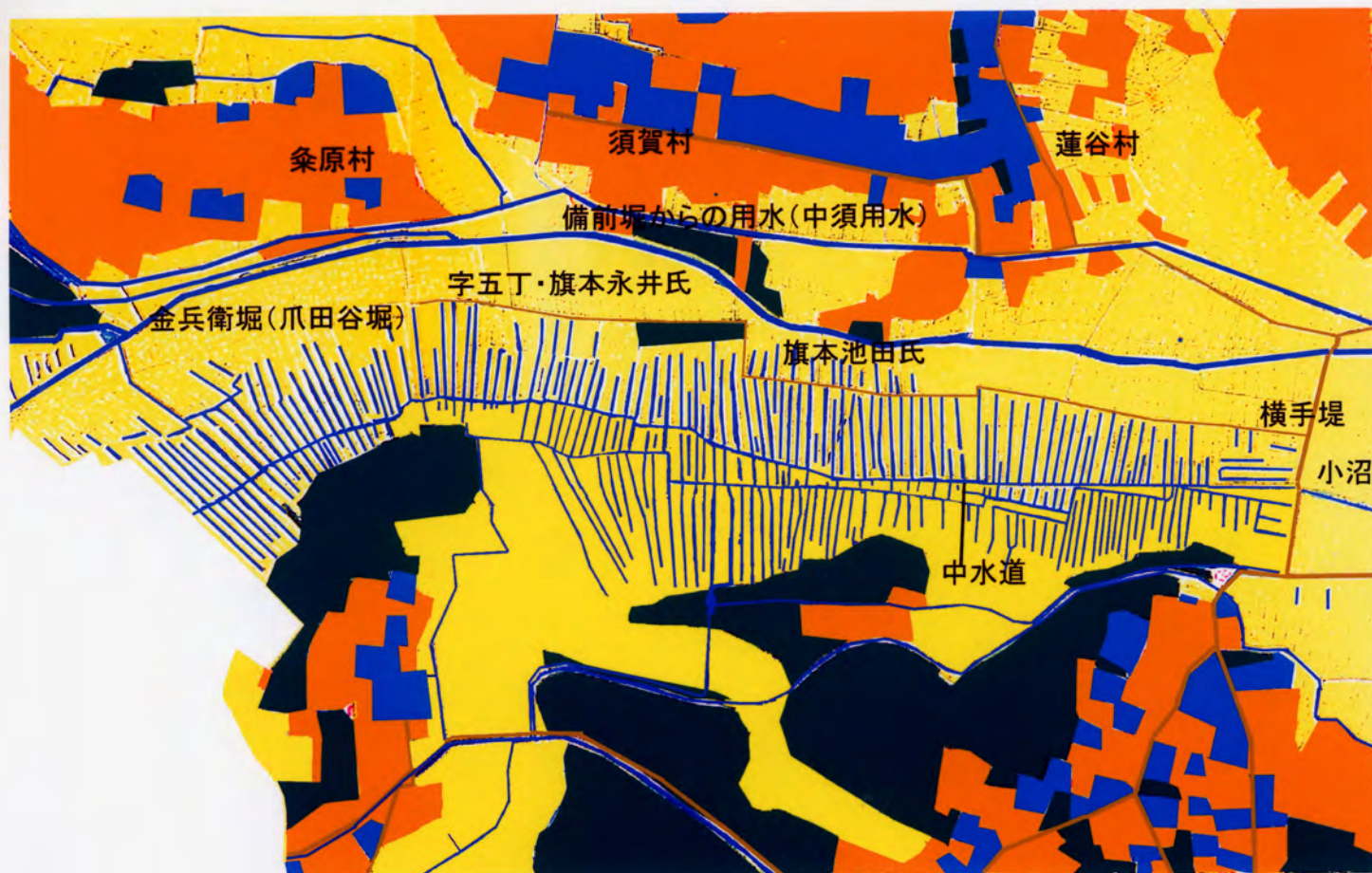
ピンク＝百間中島村、赤＝百間村、
薄青＝百間西原組、水色＝蓮谷村、
紫＝百間中村、緑＝百間金谷原組

種目	面積	名請人
下田	1反19歩	清蔵
下田	2畝12歩	清蔵
下田	1反4畝6歩	主水
下田	1畝12歩	蔵人
下田	4畝5歩	蔵人
下田	2反6畝	与右衛門
下田	8畝	喜七
下田	8畝21歩	源左衛門
合計	7反5畝15歩	

第3図 元和5年百間中島村小沼耕地面積・名請人
(享保14年百間中島村水帳写百姓持高改帳より)

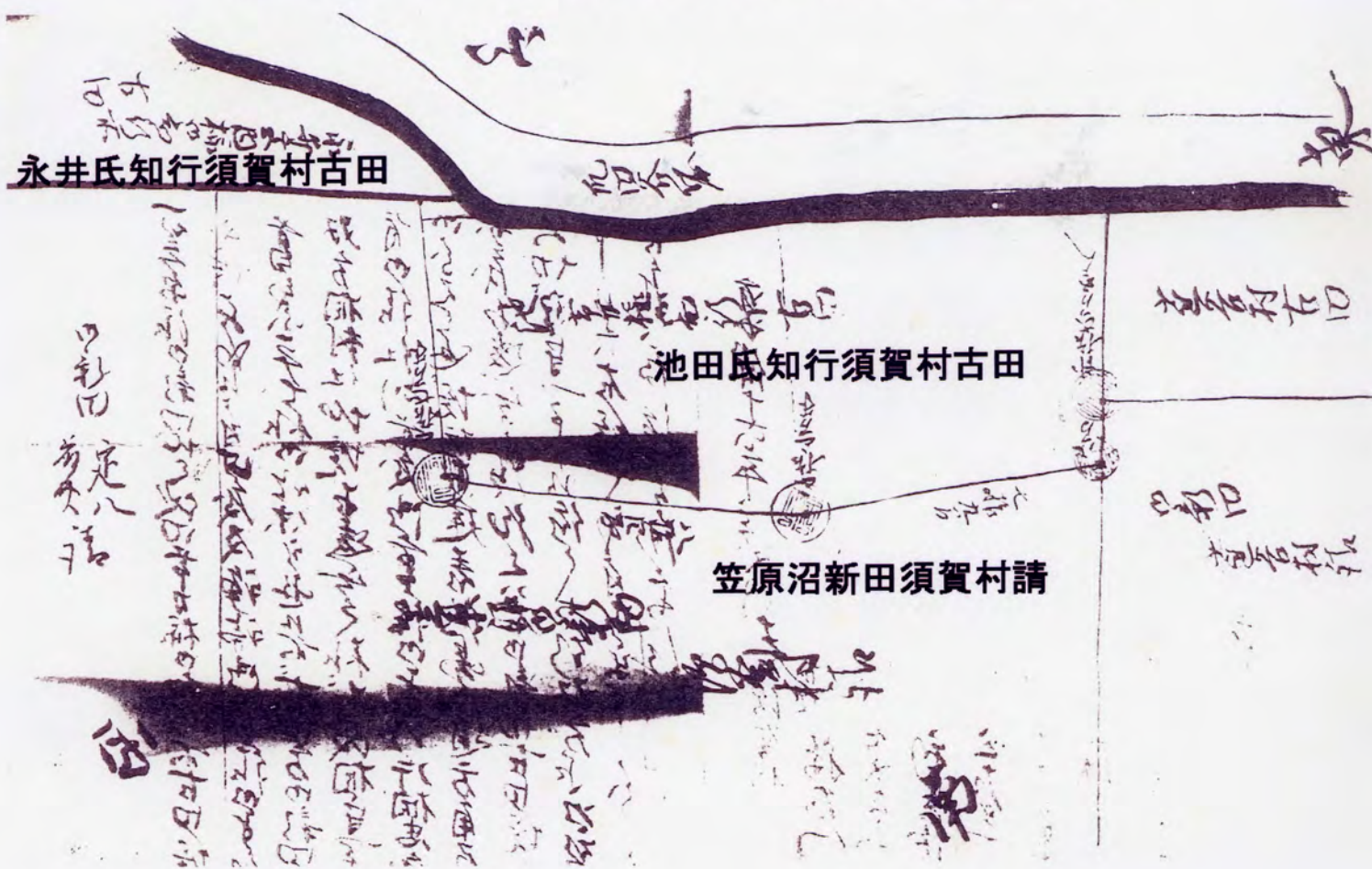


第5図
騎西領落堀堰論裁許状
絵図



第6図 笠原沼新田周辺地籍図（明治9～10年地籍図を加工）

黄色＝田圃、オレンジ＝畑、青＝宅地、深緑＝山林、紺＝水路



第7図 笠原沼新田・古田境取極絵図

史料 1 享保七年 地先出入訴状

乍恐以書付御訴訟申上候事

今度御訴訟申上候地さき出入之場所永井宮内知行高不足たるべくと奉存候訳ケ

一 元和五年未歳百間領五千石御檢地御改有之候其後同領蓮谷村と申ハ水野出雲守様御知行同須賀村源七郎組ハ池田帶刀様御知行同村拙者組ハ永井宮内知行右御三分に寛永元年子年一同ニ御知行所御割渡被遊候其節ハ御年貢献上納仕候場所ニ御座候由申伝来リ候事

一 大河内金兵衛様御奉行として上郷より惡水落堀笠原沼に御堀込被遊候其上沼下姫宮堀ニ常堰を築上郷落水を溜置下郷之用水ニ引申候依之右之田場荒地罷成候ニ付御三分御年貢御割付之表ニ茂永荒地或ハ永不作杯と御書付被遊毎年御引拾ニ成被下無年貢地ニ罷成候事

一 姫宮堀常堰ニ付廿九年以前上郷より御 公儀様迄御訴状ニ申上候共上郷過水之時ハ拂之下郷渴水之時ハ可築之と御裁許之上双方證文被仰付相究リ申候以来沼水打々干かた相見得申候ニ付右永荒地何とぞ開發仕候様ニと御地頭より被仰付別高開發仕候処ニ御帳面ニ壱町九反八畝廿七步御座候處ニ漸壱町壱反余立縁リ之分御座候年々相応之御年貢指上

ケ来候（後部 欠）

史料 2 寛永十三年 須賀村年貢割付状

子ノ年百間之内須賀村御年貢可約割付之事

一 高參百石分 田畑屋敷共ニ

右之内

一 上田貳町壱反七畝貳步 内 九畝六步子ノ毛付荒ニ引

一 中田壱町貳反七畝步 内 貳畝廿步子ノ毛付荒ニ引

四畝步子ノ毛付荒ニ引

一 下田貳町參反壱步 内

壱町八反壱畝步毎年荒ニ引

田合五町七反四畝三歩

内 壱反五畝貳拾六歩 子ノ毛付荒ニ引

内 壱町八反壱畝步 毎年荒ニ引

残て參町七反七畝七歩

一 上田貳町七畝貳拾六歩 壱反ニ米六斗三升取

此取拾三石九升五合五勺

一 中田壱町貳反四畝拾歩 壱反ニ米五斗三升取

此取六石五斗八升九合四勺

一 下田四反五畝壱步 壱反ニ米四斗三升取

此取壱石九斗三升五合

ひらき

一 下田九畝四歩 壱反ニ米四斗三升取

此取三斗九升貳合六勺

米合貳拾貳石壱升貳合五勺

一 上畑拾壱町三反四歩

壱反三畝五歩

一 中畑拾四町六反貳拾七歩 内

毎年井堀ニ引

一 下畑拾九町三反八畝拾貳歩

一 屋敷壱町七反貳畝拾五歩

畑合四拾七町壹畝貳拾八歩

内壹反三畝五歩 毎年井堀二引

残て四拾六町八反八畝貳拾三歩

一上畑拾壹町三反四歩 壹反ニ永百壹文取

此取永拾壹貫四百拾四文

一中畑拾四町四反七畝貳武歩 壹反ニ永八拾貳文取

此取永拾壹貫八百七拾壹文四分

一下畑拾九町三反八畝拾貳歩 壹反ニ永七拾文取

此取永拾三貫五百六拾八文八分

ひらき

一下畑六反四畝拾九歩

此取永三百六拾八文四分

一屋敷壹町七反貳畝拾五歩 壹反ニ永百五文取

此取永壹貫八百拾壹文

米合貳拾貳石壹升貳合五勺

此俵六拾貳俵三斗壹升貳合五勺

永合參拾九貫三拾三文

此金三拾九兩ひた百貳武文

右如此相定上ハ来ル霜月十五日前ニ、急度皆済可仕者也、仍如件

寛永拾參年

子ノ拾月廿八日

五十嵐三右衛門②⑩（花押）

史料 3 慶安元年 須賀村年貢割付状

子ノ年百間内須賀村御年貢可納割付之事

一高三百石之分 田畑屋敷共二

一上田貳町壹反七畝貳歩 内七反七畝拾壹歩 当見捨引

一中田壹町貳反七畝歩 内壹反九畝拾八歩 当見捨引

壹反四畝拾七歩 当見捨引

一下田貳町三反壹歩 内

開き

一下田壹反捨六歩 内八畝拾六歩 当見捨二引

田合五町八反四畝拾九歩 当見捨一成

壹町貳反貳畝

此内

壹町九反八畝廿七歩 毎年どぶこ成

残て貳町六反五畝貳拾歩

一上田壹町三反九畝廿壹歩 壹反ニ米六斗四升取

此取米八石九斗四升八勺

一中田壹町七畝拾貳歩 壹反ニ米五斗四升取

此取米五反七斗九升九合六勺

一下田壹反六畝拾七歩 壹反ニ米四斗四升取

此取米七斗貳升八合六勺四才

開キ

一下田貳畝歩

壹反二米四斗三升取

此取米八升六合

一上畑拾壹町三反四歩

内六畝歩

市兵衛屋敷成

一中畑拾四町六反廿七歩内壹反三畝五歩 毎年どぶこ引

年々開キ

一下畑八反七畝廿七歩 内貳畝分 不作二成

一屋敷壹町七反貳畝拾五歩

畑合四拾七町八反九畝廿五歩

此内貳反壹畝五歩 毎年井掘江不作一引

残て四拾七町六反八畝廿歩

一上畑拾壹町貳反四畝四歩 壹反二永九拾四文取

此取永拾貳貫五百六拾七文

一中畑拾四町田反七畝廿貳歩 壹反二永七拾三文取

此永拾貳貫五百六拾八文

一下畑拾九町三反八畝拾貳歩 壹反二永五拾五文取

此永拾壹貫六百三拾文

年々開キ

一下畑八反五畝廿七歩 壹反二永五拾五文取

此永四百七十貳文

一屋敷壹町七反貳畝拾五歩 壹反二永百三十五文取

此永貳貫三百廿九文

米合拾五石五斗五升五合四才

此俵四拾四俵壹斗五升立合四才

永合三拾五貫五百六拾六文

此金三拾五両貳分ひた二百六十四文

右之口金壹両ひた二百六十六文

二口合三拾六両貳分ひた五百三十三文

右之通、来霜月十五日切テ皆済可致者也、仍如件、

中田源右衛門 印

慶安元年子霜月朔日

名主中

百姓中

史料 4 正徳五年 笠原沼蔣草植付願

乍恐以願書御訴訟申上候

一笠原沼之内 殿様御知行所下田壹町九反八畝貳拾七歩有之候、彼沼古より下郷用水溜沼ニ御座候故永荒地ニ罷成候、然処ニ廿七八年以來蔣植置面々馬草刈取申候所ニ、八年以前開発被為 仰付我々共難有奉存則開発仕候て毎年稲作仕付申候得共、右申上候通古より沼下ニ土堰を構上郷惡水溜置、其上 新井筑後守様御知行所騎西領野牛村より近年惡水落新堀掘込申候ニ付、弥致満水蒔田水腐仕候、其以後水干ニ罷成植田ニ仕候得ても溜沼之儀ニ御御座候得は、大雨降申候節ハ一日壹夜之内ニも及大水ニ植田も水腐仕候て、累年不作ニ御座候故御年貢指上可申様無御座候得は、乍恐 殿様御為ニも不罷成、勿論我々共毎年種こやし二重ニ費何共難儀ニ奉存候、依之ニ何とそ右之蔣原ニ願上度奉存候得共、一旦開発仕候場所荒シ候儀如何ニ奉存候、哀願は下々畑之御年貢被為 仰付被下候は少々成共年々御年具差上、我々共も種手間こやし二重之費立不申候て偏ニ御救ニ罷成難有奉存候、右之趣乍恐以願書を御訴訟申上

候、以上、
正徳五年未三月

百間領須賀村

訴訟人	平兵衛	印
同	久兵衛	印
同	平左衛門	印
同	源兵衛	印
同	清右衛門	印
同	吉左衛門	印
同	惣右衛門	印
組頭		
同	伊左衛門	印
名主	権兵衛	印
組頭	定四郎	印
同	市兵衛	印
名主	加右衛門	印

史料 5 慶応二年 須賀村年貢割付状

御年貢可納割付之事

寅より亥迄拾ヶ年定免 武蔵国埼玉郡

一高三百貳石五斗七升八合 須賀村

内

貳石貳斗五升六合壹夕 申西新田堀敷

外高

四石五斗壹升八合七夕 中村中島村須賀村

申西潰地代地

此反別

一上田貳町七反九畝廿七歩

内

壹反七畝拾六歩 寛永二丑年享保十三申年

堀敷延宝三卯年上畑成二引

残而

上田貳町六反貳畝拾壹歩 反三斗五升取

此取米九石壹斗八升貳合七夕

上田壹反七歩 定免之内斗取下リ

内 三畝四歩 享保十四酉年新田堀敷引

残而

上田七畝三歩

此取米貳斗四升八合五夕

一中田七反九畝拾貳歩

内

壹反貳歩 承応元辰年寛文十二丑年片貝田

用水堀享保十三新田堀敷引

元禄八亥延宝三卯上畑成

残而

中田六反八畝拾歩 反三斗五升取

此取米貳石四斗貳升六合六夕

中田三畝六歩 定免之内斗取下リ

此取米壹斗貳升七合

一下田四反壹畝七歩

内

壹反八畝廿壹歩 延宝三卯年より上畑成

残而

下田貳反貳畝拾六歩 反三斗五升取

此取米七斗八升六合六夕

一下田貳反四畝廿壹歩

内

貳畝拾五歩 延宝三卯年上畑成

宝永五子年道敷引

残而

下田貳反貳畝歩

此取米七斗七升七合

一沼下田壹町六反拾五歩 沼田定免之内斗下リ

内

七反六畝拾八歩 享保十三十四同十五六掘付

新田堀敷引

残而

沼下田八反口畝廿七歩 反貳斗八升取

此取米貳石三斗四升九合貳夕

一新田八畝壹歩

此取米貳斗貳升四合九夕

一上畑拾壹町壹反五畝廿壹歩

内

貳反壹畝歩 新屋敷引

残而

上畑拾町九反四畝廿壹歩 反永百貳拾五文取

此取永拾三貫六百八拾三文八分

一中畑拾五町九反五畝壹歩

内 五反五畝廿九歩 寛永二丑年享保十三申年

新田堀敷新屋敷引

新田堀敷新屋敷引

残而

中畑拾五町三反九畝貳歩 反永百五文取

此取永拾六貫百六拾文貳分

一下畑貳拾町貳反七畝廿壹歩

内

壹反五畝廿五歩 享保十三十四新田堀敷引

残而

下畑貳拾町壹反壹畝廿六歩 反永九拾五文取

此取永拾九貫拾貳文七歩

一新下畑八反四畝廿四歩 新畑無高也

此取永八百五文六分

一屋敷耆町四反四畝廿耆歩

反永百三拾五文取

此取永耆貫九百五拾三文五分

一新屋敷七反三畝廿三歩

此取永九百九拾五文八分

一開下畑五畝歩

内

式畝拾式歩 享保十三十四新田堀敷引

残而

開下畑式畝拾八歩 反永五拾五文取

此取永拾四文三分

米拾六石耆斗式升式合五夕

納合

永五拾式貫七百式拾五文七分

右者百姓願ニ付寅より亥迄拾ヶ年定免相極御成箇割付出之名主惣百姓立合無高下割合之書面之通毎年十一月限急渡可
皆済者也

玉井伝 印

小穴呈助 印

慶応二寅年正月

須賀村

名主

組頭

惣百姓

史料 6 騎西領与百間村水論裁許状

覚

武州騎西領与同国百間村水論之事令糺明之處騎西領惡水堀之末百間村より堰を立用水取来候義十五年以前百間村近所
之村々と右之堰論有之節騎西領之者構無之今度申出候義不謂事ニ候弥如先規百間村堰をいたし用水取之騎西領より落
候惡水無滯様可仕候且又備前堀用水堰之義も可為同前為後鑑双方江如此證文遣置之間不可違背者也

寛文十二年壬四月六日

徳五兵 印 (勘定奉行徳山五兵衛)

子

杉内蔵 印 (勘定奉行杉浦内臓允正昭)

松猪右 印 (勘定奉行松浦猪右衛門信貞)

嶋出雲 印 (江戸町奉行嶋田出雲守忠政)

渡大隅 印 (江戸町奉行渡辺大隅守綱定)

本長門 印 (寺社奉行本多長門守忠利)

戸伊賀 印 (寺社奉行戸田伊賀守忠昌)

小山城 印 (寺社奉行小笠原山城守長頼)